

持続可能な人道支援のための マルチラテラル・ネットワークの構築を目指して ー フィリピンの HAVEN (安息の地) への支援を事例として ー

仲 田 和 正

1. はじめに

筆者は20世紀最大規模と言われたフィリピンのピナトゥボ火山が噴火した直後から、国際ロータリー（以下、R.I.）2550地区の国際奉仕員として被災地域の国際緊急人道支援に携わった。しかし、筆者は、大多数のロータリアンが被災者のニーズや尊厳に向き合う人道支援よりも、国際ロータリーの会員というプライドを意識したプレゼンスを優先するという狭間で、個が無力化されていくという耐え難いジレンマに直面し、R.I.を2003年に退会した。R.I.-2550地区は、20世紀最大規模と言われたピナトゥボ火山噴火の惨禍も、「昼食会で『話すこと』」にとどまり、「学ぶ」という理念を身につける事もなく「習う」という実践哲学もないまま、1名のロータリアンが退会した翌年に、被災地域の人道支援活動から撤退している¹。

ドナー側の都合で人道支援を止めるわけにはいかない。筆者は、これが転機となり人道支援活動のあり方を深く内省すると共に、新たな活動拠点となる NGO 法人 Mirai Ni Kibou Foundation, Inc.（以下、MNKF）をフィリピンに立ち上げ、支援活動の継続を模索することとなった。2003年にSEC（Securities and Exchange Commission 証券取引委員会）へ認証・登録されたMNKFの日本代表として人道支援プロジェクトに関わっている。MNKFは、理事全員が1991年6月にピナトゥボ火山噴火災害の被災地域における緊急人道支援に関わったR.I.-3810地区と2550地区のWCS（World Community Service 世界社会奉仕）活動に参画

していた経緯から、2004年にプロジェクトを引き継ぎ現在に至る。

人道支援に関わるうえで最も重視してきたのはマルチラテラル（多角的）なネットワークの構築である。このことの重要性は効果的な人道支援を継続させてきている支援関係者に広く認識されていると思われる。例えば、あるフィリピンのNGO代表者は以下のように語っている。「被災者のニーズに寄り添う人道支援を継続していくためには、ローカルNGO単体での限界や脆弱性が問題となり、常に被災地をベースとするマルチラテラルなネットワーク作りが極めて重要であると考えている。マルチラテラル・ネットワークは、情報源となる被災者自身を筆頭に、被災者と緊密な信頼関係を持つローカルNGO、バランガイ（被災地最小の自治体）の役割、援助対策の媒介組織となり得る

1 フォワード（2009）は、1920年代から30年代にロータリー運動の道徳的で哲学的な教えを最も辛口に批評した文筆家のシンクレア・ルイスが、1922年に書いた小説「バビット」に描かれているロータリークラブやロータリアンが批判の対象となり、その後何十年もロータリアンの間に陰を留めた事象について記している。バビット（Babbitt）という言葉は、米語の単語として認識されWebster's New Collegiate（ウェブスター大学生用辞典）にさえ登場し、「バビット」が「ロータリアン」と同義語扱いで定義されている。ある新聞の論説には、「ロータリークラブの機能は、『話すこと』という言葉で要約でき、ロータリークラブは行動をとることがない。会員はただ喋るか、他人のお喋りを聞くだけである。」「ロータリーはどこへ行くのか？昼食を食べに行く。」と劇作家のバーナード・ショーが嘲笑していたと記している。

前原（1992）は、ロータリーの理論と実践哲学について、「学んで習わざれば即ち暗し、習って学ばざれば即ち危し」という論語を引用し、「学ぶ」とは理念を身につけ、「習う」とはこれを実践に移すという、理念を述べている。

機能を有する国際 NGO、包括的な災害対策の連携と協働を管轄する国際援助機関、そして中央政府レベルに至るネットワークを、状況に応じてフレキシブルに直列、並列、断片的に組み替えを行い、適切に配列し直すことでより効果的な機能を促進することが可能になると思える。マルチラテラル・ネットワークを機能させるには、特定の財源に依存することのないマルチステークホルダー・エンゲージメントの概念を視野に、広範な資金調達を模索することがとても重要です。マルチラテラル・ネットワークとマルチステークホルダー・エンゲージメントの関係性は、これまでの連携や協働の枠組みに対し、より柔軟性、適応性、融通性を持たせた継ぎ目のないシームレスなパートナーシップを重視しています」(フィリピンの NGO である HealthDev 代表 Tootsie の証言)²。

しかし、マルチラテラルなネットワークの構築や維持は容易なことではない。また、マルチのあり方は多様であるし、マルチのあるべき姿は目的との関係で絶えず見直されていくべきものであろう。筆者は、マルチラテラルなネットワークの構築をベースにして人道支援に一定の成果を挙げてきたと思われる組織・団体の事例検討に関心を持っている。事例検討の積み重ねによって「持続可能な人道支援」に必要なエレメントを探っていきたいからである。本稿では筆者自身関わってきた人道支援を取り上げ、マルチラテラルなネットワークの連動体系を示すとともに、その構築過程の成果と課題を抽出する。この作業は人道支援関係者に対して「人道支援のあり方」についてのいくつかの教訓的なメッセージを投げかけることにつながると思える。

2. MNKFの創立と人道支援

MNKF の創立メンバー 7 名のうち 5 名は元ロータリアンで、2 名が現在もロータリーの正会員として登録されている。組織の会長、副会長、事務局長、財務責任者、渉外担当者をフィリピン人の理事 5 名が務め、組織代表と日本代表という重責を 2 名の日本人理事が担っている。MNKF の副会長は、R.I.-3810 地区の国際奉仕委員長を歴任するなど WCS 活動の中心的な役割を担い、R.I.-2550 地区の足利東ロータリークラブ（以下、RCAE）に所属する組織代表は、WCS 地区委員長を歴任した経験を有し、2015-16 年度の地区ガバナーに就任している。他の理事 5 名は、全く偶然とはいえ日比両地区の R.I からほぼ同時期に筆者と同様の理由から退会しているが、諸般の事情を考慮しつつ大局的見地から、副会長と代表には R.I. の正会員として留まるよう勧告した経緯があった。

筆者は、MNKF が主導した人道支援活動のオーバーオール・コーディネーターとして参画したが、フレームワークを構築する段階から直面した課題や、現場で対峙してきたジレンマの背景に介在するファクターを重要な問題と認識して捉えた。紆余曲折を経て R.I. の WCS 活動を継承した MNKF は、特定のドナーに依存しない新たなネットワークを形成して、持続可能な人道支援活動の実践に挑んできた。こうした経験の積み重ねが、本論のテーマにアプローチするためのエレメントを探り出す手掛かりとなった。

2004-05 年度に MNKF が初めて主導しコーディネートしたプロジェクトには、R.I.-3970 地区 RCCP（Rotary Club of Central Pampanga パンパンガ中央ロータリークラブ）の創立年度会長を務めた CP. Luchie や元会長の PP. Tootsie という有能な実践者が、R.I. という枠を超えてそれぞれ PSWDO（Pampanga Provincial Social Welfare

2 The Health Alternatives for Total Human Development (HelthDev) Institute, Inc.
Rosemarie Johnson- Hererra, RN Executive Director

and Development Office パンパンガ州社会福祉開発局) / PDCCO (Provincial Disaster Coordinating Councils Officer 州災害調整委員会) 所長、HealthDev 専務理事という最前線の領域から参画し協働していた。この人道支援活動は、日比両国の中央省庁をはじめとして被災地域の政府、R.I.、クォータ・インターナショナル、国際ソロプチミスト、大学、高校、ボランティアなどが多方面から参画し、ロジスティクスに関する分野も、内外の製薬会社から供与された薬剤や、拠出された義捐物資などを無償で空輸する航空会社の協力を得るなど、マルチラテラルなネットワークとマルチステークホルダー・エンゲージメントの構築を目指した先駆的な事例とすることができると思われる。

MNKF は、最も甚大な被害を受けたパンパンガ州サンフェルナンド市を拠点に、被災地域の保健衛生指導、青少年の健全育成、Mirai Ni Kibou 子供図書館の設立と運営、HAVEN の自立自活支援などを主要なプロジェクトに取り組んできた。

被災地域の保健衛生指導は、DSWD (Department of Social Welfare Development 社会福祉省)、PampaNGO (The Pampanga Association of Non-Governmental Organizations, Inc. パンパンガ NGO 組織連盟)、PHO (Pampanga Health Office パンパンガ州保健事務局) 等と連携して無料の医療や歯科の診療奉仕と投薬 (薬価で約 500 万円から 900 万円相当)、公衆衛生の指導、虚弱児童の蟯・回虫駆除、高血圧・糖尿病患者の社会復帰を支援する医療プログラムなどを毎年の継続事業として実施してきた。

青少年の健全育成は、貧困から非行や麻薬、犯罪に手を染めてしまう青少年を守るためにラモス大統領が提唱した PE (Physical Education スポーツ健全育成) プログラムに適応する人道支援プロジェクトの MOA (Memorandum of Agreement 合意書) をパンパンガ州知事、サン

フェルナンド市長と結び、RCCP の協力を得て貧困地域に野球チームを設立する。大学野球の経験者やスポーツ用品経営者が中心となって集めた野球用具を持参し、直接技術や運営方法を指導する。随時、チーム名の入った公式ユニフォーム、帽子、ストッキング、スパイクなどを現地調達し、12 のチームを編成している。野球が未経験だった被災地の野球チームからフィリピン少年野球のナショナルチームに 1 名が選出され、日本で開催された国際大会に出場するため来日するという、成果を上げている。

Mirai Ni Kibou 子供図書館の設立と運営に際し、筆者は、MNKF 事務局長と DSWD 所長と共に 9 か所の私立・公立の図書館を訪問して、図書館の運営や活用状況について実態調査を行い、検討すべき重要な課題を持ち帰る。MNKF は、ソーシャルワーカーの資格を有する DSWD 所長から、被災地域の未就学児童に対する教育支援を目的とする要請を受け、サンフェルナンド市から提供された建設予定地の中から、教育省第 3 行政区内に点在する 11 の小学校区域 (児童数 7143 人) を対象に図書館の設置場所を選定した。

2005 年に子供図書館の設立計画書が作成されてから 2006 年 5 月の開館までに、年間の維持管理費用に伴う財源の確保や職員の雇用、また司書による蔵書の選定など、持続的な運用を可能とするフレームワークの構築について 13 回の協議を重ねた。Mirai Ni Kibou 子供図書館は、日本のステークホルダーから毎年定額の資金援助を受けながら、DSWD、サンフェルナンド市、RCCP、QIP (Qouta International Pampanga クォータ・インターナショナルパンパンガ) が連携して運用している。

3. HAVENの歴史と概要

本稿で取り上げる人道支援はフィリピン

の HAVEN を対象とするものである。1981 年初頭、WEDC (Women in Especially Difficult Circumstances 最も窮境な状況下にある女性) を救済するための Home for Women (シェルター) が、DSWD の管轄下に開設された。保護された少女の多くは、幼少期の最も重要な発達段階において、親に無視され社会から看過されて生きてきた少女たちである。特に貧困最下

層に分類される家庭環境に置かれた少女たちは、多くが性的虐待の犠牲者となり、強姦、近親相姦、人身売買、少女売春の強要、未婚の母、性的搾取など耐え難い劣悪な運命に翻弄され、深刻な Mentally (精神的)、Physically (身体的)、Emotionally (感情的) なダメージを負って施設に収容されている。

表 1. Folk of HAVEN WEDC (最も窮境な状況下にある女性)

事例の種類	Pam*	Tar*	N.E.*	Bat*	Bul*	Zam*	合計
看過/遺棄	4			1		1	6
身体的虐待や酷使	1				1		2
人身売買の犠牲者	6				1	2	9
性的虐待の犠牲者							
・強姦	6						
・近親相姦	9				1 3	4	2 3
・性的挑発行為の強要					1		1
悪しき特殊環境に生まれた児童 (両親が服役)	6	1		1	4	2	1 4
隷属的な犠牲者	5	1	2		4		1 2
奴隷状態から逃れた孤児	6		1		2		9
合計	4 3	2	3	3	2 8	1 0	8 9

注*: Pampanga (パンパンガ州)、Tarlac (ターラック州)、Nueva Ecija (ヌエバ・エシハ州)、Battán (バタン州)、Bulacan (ブラカン州)、Zambales (ザンバレス州)

出所:筆者作成 (参考資料) HAVEN active cases of September 21, 2014.

1997 年 9 月 1 日に DSWD 第 3 行政区は、PAC (Pampanga Agricultural College) の Dr. Ramon Simbulan 学長と CSFI (Congressional Spouses Foundation, Incorporated) の Ma. Georgina P. De Venecia 代表 (PAC 敷地の地主) との間で、1 ヘクタールの土地を無償で 2022 年 8 月 31 日までの 25 年間に亘り使用でき、さらに 25 年の延長が明記された MOA (Memorandum of Agreement 合意書) を取り交わした。アラヤ山麓の PAC 敷地内に CSFI からの寄付金を受けて建設された施設は、名称も Home for Women から HAVEN へと変更された。HAVEN は、現在、

ダバオ市、セブ市、タクロバン市などフィリピン全土にある DSWD の 8 行政区内に設置されている。

MNKF が関わってきた HAVEN は、DSWD 第 3 行政区が管轄するシェルターのひとつである。ここには、ピナトゥボ火山噴火災害の人道支援から置き去りとなり無視された被災地域の貧困家庭から、自由や希望を放棄した故意の約束によって、性産業に引き渡されていった少女たちが保護されている (2014 年 9 月 21 日現在、89 名)。

HAVEN のスタッフは、ヘッド・ソーシャル

ワーカーから親代わりを務める職員まで全ての担当部署が女性で構成され、少女たちが背負っているトラウマやカルマに対する細心の注意と配慮が払われている。

HAVEN は、「貧困に喘ぐ弱者、恵まれない環境に置かれた家族や地域に、生活の質と向上のために権限が与えられる社会」をビジョンに掲げ、「貧しい個人、家庭、地域社会の権利と福祉を推進する。貧困緩和に対する社会福祉・開発プログラムや公的プロジェクト政策を、地方自治体、NGO、PO、GO、市民社会などと連携し、協働して貢献する」ことをミッションとしている。HAVEN は、WEDC が自身の問題を解決して自己の価値と尊厳を取り戻すことができるよう、個々のカウンセリング・プログラムとライブリーフッド・トレーニングを有効に用い、共同生活を通じた社会復帰へのサポートを目標としている。

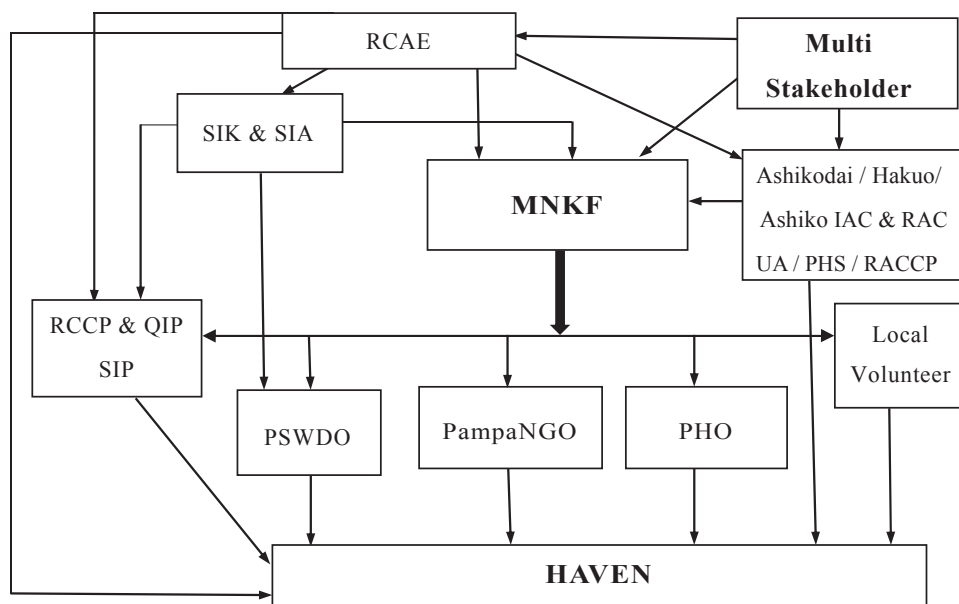
HAVEN では、一人ひとりの状況を慎重に見極めながら、有用な日課、週間、年次の下記プログラムが適応されている。「個別およびグループカウンセリング」、「法律要件に基づく保護救済」、「ライブリーフッド技能開発」、「教育支援」、「医療提供」、「ケースワーク（個別にサポートを行なうプログラムの実践的アプローチ）」、「居住環境への配慮」、「妊婦と児童養護」、「学校通学」、「精神の高揚」。

4. HAVENに対するMNKFの人道支援の連動体系

HAVEN に対する人道支援プログラムは、MNKF が主導する 2004 年まで R.I.-2550 地区と 3810 地区のバイラテラル（二者協定）な共同地区友好関係協定書に基づき WCS 活動が主体となっていた。施設内の設備や備品を補充する（業務用ミシン 5 台、冷蔵庫、冷凍庫、草刈り機、揚水ポンプ機、医療器材、計量器など）支援プログラムが中心であった。

2004 年以降は、MNKF が中心となる新たなマルチラテラル・ネットワークとマルチステークホルダー・エンゲージメントの構築を視野に、ライブリーフッドプログラムを重視したプロジェクトの実践を目指した。2005 年度の人道支援プロジェクトに関する理事会が 8 月 27 日と 29 日の両日に開催され、MNKF の会長、副会長、事務局長、日本代表さらに DSWD と PHO の所長が同席し、HAVEN の自立自活支援プログラムを実践する際に必要となる、フレームワークの可能性について闊達な議論がなされた。これまでに培われてきたバイラテラルなチャンネルも維持しながら、MNKF を中核とするマルチラテラル・ネットワークとマルチステークホルダーが連動する、新たな支援体系のフレームワーク構築を目指すことになる。

図 1 は、Riddell が提起した「グローバルな人道支援のための枠組み」を参考にして HAVEN に対する MNKF の人道支援に関するマルチラテラル・ネットワークとマルチステークホルダーの連動体系を図式化したものである。



出所：筆者作成（参考資料） Roger C. Riddell, 2007, “Dose Foreign Aid Really Works?”

図1 Humanitarian Aid for HAVEN
Multi-lateral Network and Multi-stakeholder Engagement Mechanism
ヘイブンの人道支援に適應する
マルチラテラル・ネットワークとマルチステークホルダーが連動する仕組み

矢印は、マルチステークホルダーから提供される義捐物資が、MNKFの主導する人道支援活動を支える根源となり、更に協働するRCAEや下部組織のInteract/Rotact Club、SIK、SIAなどの国際援助組織へと連動していくプロセスを表し、MNKFを中核とする広範なマルチラテラル・ネットワークの実践部隊（RCCP & QIP, SIP, PSWDO, PampaNGO, PHO, Local Volunteer）を介して、HAVENに供与される物質的・人的アプローチの仕組みを示している。

Multi-Stakeholderの概要

- * 栃木県内の幼稚園や小・中・高等学校の生徒及びPTA
- * 国内外の製薬会社
Astellas Pharmaceutical Inc.、AstraZeneca K.K.、Bayer Ltd.、Japan、Pfizer Japan Inc.、Tanabe Seiyaku Co., Ltd
- * フィリピン航空、フィリピン航空財団

- * YAMAHA、フィリピンYAMAHA
- * 獨協医科大学カウンセリングルーム
カウンセラー
- * 市民ボランティア（児童養護支援グループ“Dimple”）
- * 日本の社会的起業家（InterRep Japan Co., Ltd. Head Creation Inc. K2 Research Institute）
- * 篤志家

略語の説明

- * RCAE: 足利東ロータリークラブ
- * Ashikodai: 足利工業大学付属高校
- * Hakuo: 白鷗大学付属高校
- * Ashiko: 足利工業高校
- * UA: University of the Assumption
アサンプシオン大学付属高校
- * PHS: Pampanga High School パンパンガ高校
- * IAC: Interact Club インターアクト・クラブ
- * RACCP: Rotaract Club Central Pampanga

セントラルパンパンガ ローターアクト・クラブ

* SIK: Soroptimist International of Kanuma

国際ソロプチミスト鹿沼

* SIA: Soroptimist International of Ashikaga

国際ソロプチミスト足利

* SIP: Soroptimist International of Pampanga

国際ソロプチミストパンパンガ

* RCCP: パンパンガ中央ロータリークラブ

* QIP: 国際クォータ パンパンガ

* PSWDO: パンパンガ州社会福祉開発局

* PampaNGO: パンパンガNGO組織連盟

* PHO: パンパンガ州保健事務局

* Local Volunteer: 被災地域のボランティア

MNKF は、広範なマルチステークホルダーから寄せられる多様な支援の調整を行うと共に、これまで協働してきた RCAE との連携も重視しながら、HAVEN が必要としているプログラムに適応できる、実践能力を有する組織とコンタクトを図り、マルチラテラルなネットワークのフレームワークを構築して、プロジェクトの持続性をコンダクトしている。

マルチラテラル・ネットワークとマルチステークホルダー・エンゲージメントによる連動体系は、主に日本側がドナー的役割を担い、各プログラムに賛同する組織や企業が義捐物資の供与や活動に参画するボランティアによって形成されている。特に RCAE とは、MNKF の代表を務める N 医師（2015-16 年度 R.I.-2550 地区ガバナーに就任）との関連から、20 数年に亘り協働するフォーメーションを堅持してきた。R.I. は、新世代の多様なニーズを支援するプログラムとして、各地区内における結成を推進している。R.I. 理事やガバナーを輩出している RCAE は、両国の Interact / Rotaract Club 支援を積極的に行い、2005 年以降も MNKF が主導

する人道支援活動に毎年参画している。

SIK と SIA は、R.I.-2550 地区の夫人が主要なメンバーとなり、特に両クラブ内における地区ガバナー夫人の権威とリーダーシップが、MNKF との緊密な連携を継続していく要素になっている。MNKF は、常にマルチステークホルダーとの緊密な信頼関係の維持に努め、多様なプログラムに適応できるマルチラテラル・ネットワークや実践可能なフレームワークの構築に取り組んでいる。

5. カウンセリング・プログラム

HAVEN における個別およびグループカウンセリングの一環として、アートセラピーと呼ばれる美術や芸術によって自己表現しようとする、人間活動に適応したりハビリ療法が実施されている。これまでに行なってきた代表的なアートセラピー・プログラムは、音楽療法とも言われている音に心を委ね楽器に触れて楽しむミュージックセラピー、シュールレアリズム手法を用いて写真や様々なオーナメントなどを貼り合わせるコラージュセラピー、更に松笠やドングリ、ワインコルク、ボトルキャップ、色紙や毛糸など身近にある物を利用して段ボール箱などを飾り、宝箱を作成するトレジャーボックスセラピーなどがある。各プログラムは、アートのもつ潜在的な力を通してインナートリップし、個々が抱えているトラウマやカルマと向き合い、一時的ではあるが呪縛から開放されるというセラピーの特性から、臨床心理学や精神医学の専門家によるアドバイスをを受けて作成され、アートセラピーによって解き放たれた心のアフターケアについても十分な対応ができるよう、慎重に検討を重ね実施している。

5-1. ミュージックセラピー・プログラムの実践例

WEDC の幼少期に共通する家庭環境から、満足な義務教育（小学校）さえ受けられなかった少女たち一人ひとりに、リコーダーやピアノが手渡され、ミュージックセラピー・プログラムが実践された。これらの楽器は、日本の小・中学校で導入された異文化について学ぶ国際理解教育という総合学習に招かれた筆者の講話から、フィリピンの子供達が置かれている「現実を知り」、知ることから学んだ日本の児童が積極的に学校や両親に支援の働きかけをして集められたものである。HAVEN の少女達に関する赤裸々な話は、日本の小学生にとって理解し難い主題と思い、スモークーマウンテンやパヤタスのゴミ処分場に暮らす Scavenger（スカベンジャー、ごみくずを拾い集めて生計を立てている人）の子供が、学校にも行けず一日中ごみ拾いをしている現実を、写真とイラストを用いて紹介した。児童はガイダンスに従い、教師や保護者と一緒になってスカベンジャーの生活を疑似体験する、ロールプレイングを行った。午前中の時限をフルに使った総合学習は、児童を取り仕切る悪徳ボスを演じる教師の指示に従い、予め持参した新聞紙や広告チラシ、雑誌などを一枚ごとクシャクシャに丸めて教室や廊下に散乱させてから、児童が学用品の詰まったランドセルを子守代わりに背負いながら、それぞれのグループ別に新聞紙、広告チラシ、雑誌に分類してごみを回収し、保護者が廃品買取り業者となって集められた廃品を計量し買い取るという設定をした。国際理解教育は、劣悪な環境で暮らすフィリピンの子供たちが、毎日行っている 3Ds（Dirty、Dangerous、Demeaning 汚い、危険、きつい）なゴミ拾いを、教室や廊下を使いシミュレーション化して実践された。

過酷な現実の一端を体感した児童の声が両親

や教員を動かし、支援の輪は幼稚園から中学校にまで波及した。中学生では使用しなくなったリコーダーとピアノの回収が、PTA を中心に呼びかけられ、毎年楽器が集められるようになった。幼稚園からは、マーチングバンドで使用している楽器の買い替えに伴い、各種ドラムやザイラホン、スティックなどを寄贈したいとの申し出があった。幼稚園児からは、交通安全週間に実施されたパレードにマーチングバンドとして参加した謝礼に贈られた、百数十箱のクレヨンセットが HAVEN のクリスマスギフト用に差し出された。少子化に伴い統廃合となった小学校へも出向き、不要となったアコーディオンや木管、金管、打楽器などを貰い受けた。さらに 6 年生が 16 名という山村の小学校では、児童たちが自ら話し合って義捐物資を募るポスターを作り、使いかけの鉛筆（820 本）やノート（86 冊）、消しゴム、定規、コンパスなど様々な文房具と、きれいに洗濯された夏物の洋服類（314 枚）やタオル（176 枚）、スニーカーなど、児童たち一人ひとりの想像をはるかに超える多くの善意が集まった。

児童たちは、放課後や休日を利用して、物資の分類や段ボール箱へのパッケージ作業も率先して行うなど、積極的な参加意識をもって国際理解を深め実践していた。筆者の元に届けられた段ボール箱には、6 年生 16 名全員と指導教員の感想文が綴られた学級通信「ひだまり」と共に、児童が募った義捐金 4,728 円が添えられていた。筆者は、児童から託された初めての義捐金に戸惑い使途に苦慮したが、HAVEN の少女たちに必ず届けてくることを約束してお預かりした。筆者は、熟慮のすえ義捐金に少額を加えてキャンディー 50 袋を購入し、児童が募った善意の軌跡が明示できるよう、透明のビニール袋に入れてフィルムに収めた。キャンディーは、他の義捐物資と共に成田空港の搭乗カウンターでチェック・イン、フィリピ

ン空港の到着ロビーで現地スタッフと合流、そして、満面に笑みをたたえた HAVEN の少女たち一人ひとりに手渡されたキャンディーを映像に納めた。

帰国後、早々に HAVEN から預かった感謝状とドライマンゴーを携えて、お礼を兼ね山村の小学校を訪れた。校長はじめ教員と児童全員に温かく迎えられ、全校生徒と一緒に自校給食を頂きながら、報告を兼ねフィルムの上映を行なった。ドライマンゴーを初めて口にする児童の顔には、善行をやり遂げた自信と喜びの表情が溢れていた。山村の小学校を卒業した児童たちが進学した町の中学校では、彼らが中心となってボランティア活動が活発に行われるようになり、HAVEN に対する支援の輪も広がっていった。

こうしたマルチステークホルダーの拡大と人道支援プロジェクトの周知によって、幸運にもミュージックセラピーの資格を有するピアノ講師や音楽教師が HAVEN のプロジェクトに参画してきた。2012 年には、ピアノ講師の発案によって「HAVEN の天使たち」と題するチャリティーコンサートが企画され、アーティストの無償協力による出演はもとより、日比両国の政府機関や企業、大学、国際援助機関、メディアなどから後援を得て実施された。

395 席分のチケットは、国際理解教育という総合学習を体験した児童や PTA はじめ、地域のコンサートに対する関心も高く、事前の新聞報道や広報などが相まって数週間前に完売した。1984 年に創設された鹿沼フィルハーモニー管弦楽団の団員は、モーツァルトやベートーベンのピアノ三重奏曲を演奏し、音楽一家の Ogury's は、唱歌で綴る日本の四季やディズニーメドレーで構成された、アットホームなファミリーコンサートを披露した。P.A. (Utsunomiya Percussion Association) は、1982 年に元日本フィルハーモニー交響楽団の打楽器奏者によって創

立され、ビゼーのカルメンやバリー・マニローのコパカ・バーナ、マル・マル・モリ・モリ、ルパン三世などビートの効いたアップテンポな曲に、ダンス・パフォーマンスを融合させたステージを展開して会場を魅了した。さらに、地元から賛助出演した鹿沼東中学校オーケストラ部は、「こども音楽コンクール重奏部門」で文科大臣奨励賞に輝いた演目、協奏曲『四季』より「春」を弦楽 6 重奏の見事なアンサンブルで演奏し、拍手喝采を浴びた。ホールのロビーで同時開催されたフェアトレードには、会場を訪れた多くの人々から善意や義捐金がプロジェクト継続のために寄せられた。チャリティーコンサートは、ローカルテレビ局によって全編と Joseph 会長のインタビュー収録が行われ、後日ダイジェスト版が特集番組として放映された。コンサート会場となった鹿沼市民文化センターには、身障者席も設置されており、重度の障害や心身にハンディキャップを負った児童が大勢招待された。また、フィリピンからは MNKF の Joseph 会長夫妻はじめ、Tony 事務局長、Elmer 財務担当夫妻が来日し、Haven の Rosario G. Cebicus 代表とフィリピン YAHABA 総代理店 Philip L. Yupangco 社長のメッセージを携えて参加した。

小学校の総合学習からスタートした人道支援活動に対するアプローチが、国際理解教育を推進させ、シームレスなマルチステークホルダー・エンゲージメントのフレームワークを形成する礎となった事例である。日比のステークホルダーが支援するミュージックセラピー・プログラムは、日本で集められた楽器がフィリピン航空やフィリピン航空財団の協力によって無償で空輸され³、プログラムの内容に関してはピアノ教師のガイダンスに沿って DSWD と調整を図り、RCCP や MNKF、UA、QIP などが協働するマルチラテラル・ネットワークによって、漸く実践が可能となった。ミュージックセ

ラピー・プログラムは、パンパンガ州を拠点とする RCCP が中心となって構築されたフィリピン YAHAMA⁴ 総代理店のランチや UA の IA による音楽関係者のサポートを得て、継続的な支援が担保されている。

5-2. アートセラピー・プログラム

ミュージックセラピー同様に、コラージュセラピーやトレジャーボックスセラピーといったプログラムの持つ潜在的な力を活用したプロジェクトが実施された。アートセラピー・プログラムの実施に際しては、マス（2004）や

ロジャース（2000）などの専門書を参考に素案を作り、プログラムそれぞれの目的、内容、方法などに関する具体的なセッション・プランの作成や、プログラムで得た関連資料（ビデオ映像、絵画、コラージュ）の分析など、専門家の広範な指導を仰いでいる。

アートセラピー・プログラムは、ハーマン（1996）が述べている、「安全の確立」、「想起と服喪追悼」、「再結合」を重要なテーマとして捉え、少女たちが抱えているトラウマを、アートという非言語的なコミュニケーションを用いて形に表し、忌まわしい記憶を想起し吐き出す「フラディング（情動洪水法）」インテンシブなプログラムの服喪追悼によって自らの物語を紡ぎ直している。そして、同じような苦しみを経験した人々が寄り添い痛みを分かち合う共同生活を通して、また、他者との結びつきを深め再結合していくというルーチンを通して、心的外傷からの回復を進めることを目的としている。少女たちの声なき叫びと苦悩を一つ紹介する。

「HAVEN は、MNKF が力を合わせているように、日本とフィリピンも力を合わせて、虐待をなくして欲しい。ここで自立できるプログラムをしてもらっていることに感謝している。HAVEN から出られる日を夢見ている」(19歳)。

トレジャーボックス・プログラムに必要なマテリアルは、セラピー担当者の指示に従ってす

3 ピナトゥポ火山噴火のような大規模自然災害時における人道支援は、被災者ニーズに呼応する初動段階の緊急援助が最も重要であり、最初に駆けつけることのできる被災地自治体の対応やローカル NGO の役割が極めて重要となる。しかし、途上国の脆弱な組織体では人道支援の対応能力に限界があり、国際的援助ネットワークを活用した連携強化による、支援規模の拡大が不可欠であった。筆者は日本側のオーバーオール・コーディネーターとして、義捐金や医薬品など人道支援物資の国内調達を推し進めると同時に、現地と緊密な連携を取りながら人道支援物資の通関に必要な特別免税許可書や、1 トンを超える物資輸送に伴う航空貨物運賃の免除承諾書を得るために、関係省庁への働きかけを行った。限度額を超える外貨や生活支援物資の持込は、たとえ人道支援という善意であっても商取引に転用が可能であるとみなされ、論理的に無条件で認められることは、決して容易ではなかった。また、国内外のメーカーから無償で供与された医薬品（薬価で1000万円相当）の持込に関しても、米国以外からの医薬品輸入を厳格に規制しているフィリピン政府の政策が障壁となり、許認可を取得するのに困難を要した。

現在では、MNKF が予め DSWD との間に義捐物資に関する合意書を取り交わし、フィリピン政府から発行された DSWD 管轄の HAVEN が受諾施設となる証明書をフィリピン航空本社に提起し、成田空港のフィリピン航空カウンターに義捐物資のロケーター・ナンバーを登録する。日本出国に際し、特別チェックインカウンターが設置され搭乗手続きや義捐物資（合計50箱477.2kg）の搬入がスムーズに行われる。正規には、支払うべき超過預け入れ荷物料金（1kg＝¥1900）¥906,680 が無償となり、優先取扱い荷物として搬出時も便宜が図られ、通関もフリーパスとなる。フィリピン航空財団とも連携し、HAVEN のライブリーフッド・プロジェクトを支援する、新たなプログラム（航空会社のユニフォームをリサイクル、リユース）の立案を検討している。

4 アートセラピー・プログラムに参画した、ミュージックセラピストの資格を有する音楽家が、HAVEN に YAMAHA デジタル・ステージピアノを寄贈する際に YAMAHA の協力を仰ぐ。フィリピン YAMAHA 社長は、ミュージックセラピー・プログラムに対する賛同の意を表し、YAMAHA 本社と交渉して日本からの SHIPPING 費用や、ピアノ関連機材も含め無償で提供する確約と共に、ヤマハ音楽教室のスタッフやパンパンガ州支社のチャンネルを活用したプログラム支援を申し出る。前出の音楽教室を主宰するミュージックセラピストが日本で主催した HAVEN のチャリティーコンサートにも協賛し、祝辞を寄せている。2015年11月29日には第2回目となる HAVEN のチャリティーコンサートが開催された。

べて日本で調達し、DSWD 管轄の施設で使用する人道支援物資扱いとしてフィリピン航空や税関の理解と協力を得て HAVEN に搬入された。2014 年 9 月 20 日に予定されていたプログラムは、台風の直撃を受けた影響で中止となったが、開催も危ぶまれるなか幸いにも翌 21 日には天候も回復し、参加関係者全員の日程調整も図られ、予定通りにプログラムを実施することができた。

トレジャーボックス・プログラムは、自分にとって一番大切なものを思い浮かべ、心に描いた素敵な宝箱を作成して、その中に大切なものを収めるプロセスを楽しむことを目的とした、アートセラピー・プロジェクトの一つである。少女たちが、WEDC の現況から脱出して未来に希望が抱けるような、インナートリップする時間と空間を作り出せるよう、プログラム会場のレイアウトなど細心の注意を払って実施した。

プログラム終了間際に行われたインタビューは、HAVEN のヘッド・ソーシャルワーカーやスタッフ立会いの下、MNKF 会長婦人の Rosalind (Lyn) W. Ang と HealthDev 代表の Tootsie によるコンダクトで進められ、少女たちの悲痛な面持ちや悲惨な証言がビデオに収録された。証言は、地方独特の方言やタガログ語で語られた内容について正確に理解することが、後に専門家の助言を仰ぐうえで極めて重要となるため、Tony 事務局長がインタビュー録音を英文に起こしたものを日本語に置き換えている。

インタビューは、完成したトレジャーボックスを手にした少女に、「何を宝箱に入れたいですか」という Lyn の優しい問いかけで始まった。暫く沈黙が続いた後に少女は、俯いたまま目も合わせず小さな声で淡々と独り言のように語り続けていた。次第に、Lyn の顔がくもり目には涙が溢れ、傍らに腰を下ろしていた

Tootsie も嗚咽していた。

最初のインタビュー証言者 A (17 歳) は、パンパンガ州の貧困家庭に生まれた。生まれながら足に重度の障害を持つ A は、小学校 4 年生のとき両親が犯罪者となり収監された後、叔父の家に預けられた。しかし、このときから叔父による性的虐待が始まり、さらに従兄弟からも執拗な性行為を受け続け、幼くして叔父の子を妊娠し出産した。その後、性産業に身売りされた A は、障害を持つ少女売春婦として好奇的になり、長く苦しい闇黒の世界に身を置いたまま三児の母となった。生まれた乳児はすぐに里子に出され、最後の子が里子に出された僅か 1 か月後の 2013 年 1 月、辛うじて HAVEN に保護された。何度も苦境から脱出をしようとしたが、不自由足では逃げ出すことが出来なかったと吐露している。A は、全く消息の分からない子供の安否を気遣い、乳幼児の臓器売買が問題となったシンジケートに売られてしまったのか、裕福な外国人に引き取られて幸せに暮らしているのか、健康と無事を神に願い一身に祈りを捧げていた。トレジャーボックスを作るプロセスにおいて初めて自身と向き合い、頑なに閉ざしていた心の闇から自分を解き放した A は、悲惨な過去の一つひとつを吐露して宝箱に収め、健康に暮らせる日が一日でも長く続くよう神に懇願していた。

トレジャーボックス・プログラムに参加した B (19 歳) は、自らインタビューに応じたいと積極的にアプローチしてきた。B はブラカン州に生まれ悪しき特殊環境のなかで幼少期を過ごしたが、その後、人身売買によって白人の性奴隷となり麻薬常習者に仕立て上げられた。さらに売春を強要された B は、歓楽街で客引きをしているところを 2007 年 4 月に保護され 7 年間 HAVEN で過ごしているが、社会復帰をするのはまだまだ無理であると述べてい

る。まず、Lyn の「貴方が作った宝箱について何を語りたいのか」との質問に、B は「思い出と記憶の全部を閉じ込めて置くに相応しいところ」と言った。「他には」との問いかけに、宝箱から黄色のリボンと黒のリボンを取り出し、神が自分に与えてくれたギフトであると語りだした。長い黄色のリボンは、B を幸せにしてくれる HAVEN の家族や姉妹、ビジターを表し、短い黒のリボンが、これまでの忌まわしい出来事や悲観的な思考を象徴していた。B は、親愛なる神だけが最高絶対の審判者として自分を見守り、他の誰も私自身の過去に触れることはできないと語っていた。これからの長い人生で苦難や試練に遭遇した時、毎朝太陽が昇るように毎日新しい希望を神が示し、トレジャーボックスに収めた黄色と黒のリボンは、B に夢をもたらす宝物となる。

6. ライブリーフッド・プロジェクト

HAVEN では、適時 5 から 7 種類のライブリーフッドプログラムが、それぞれの希望や適性に応じて実施されている。オートミル・クッキー、砂糖焼き菓子細工、郷土菓子の製造・販売は、MNKF の人道支援に参画するマルチステークホルダー（R.I.-2550 地区 RCAE、R.I.-3970 地区 RCCP、QIP など）によって、業務用のブレンダーや大型ガスオープンなどのプロ用機材が備えられ、R.I. が掲げる Vocational Service（職業奉仕）に属する専門的な菓子・パン職人の技術指導によって、高品質なクッキー作りと大幅な増産が可能となり、クリスマス時期には 20,000 枚のクッキーを売り上げる代表的なプログラムとなっている。HAVEN のライブリーフッドプログラムを継続していくには、ハード・ソフト両面からの支援を実践するためのマルチラテラル・ネットワークとマルチステークホルダー・エンゲージメントのフレームワークによ

るアプローチが不可欠なエレメントになっている。

筆者が、Vocational Guidance（職業・就業指導）を通して関った、美容技術クラスのライブリーフッドプログラムの実践例について述べる。筆者は 1970 年初頭に渡米し、カリフォルニア州ライセンス取得後にヘアドレッサーとしてビバリーヒルスのサロンに勤務する傍ら、米国最大といわれたプロ用美容化粧品メーカー REDKEN の RDD/GA（Research Development & Department/Guest Artist）となり、その後も Performing Artist として欧米諸国はじめアジアの大都市で、年間 100 日を越えるヘアショーや講演活動を行なってきた。

HAVEN で共同生活する少女たちにとって、限られた境遇の中で互いの髪をカットしセットすることは、ささやかな楽しみの一つであった。筆者は、お洒落に強い関心を持つ少女が、専門的な美容の技術が修得できるよう、実践可能なプログラムのフレームワークを検討した。まず、継続的な技術指導をするための組織的な人材確保と、受講希望者に最低限必要な美容キットを供与する資金の獲得が当面の急務となった。そこで MNKF は、パンパンガ州全域にネットワークを持つ PSWDO 所長に、適応する有能な人材を有するローカル NGO の推薦を仰いだ。他方、資金の獲得に関しては、これまで実施してきたライブリーフッドプログラムに資金供与を行っていた SIK⁵ から、美容技術クラスに対する支援の快諾を得ることができた。HAVEN のライブリーフッドプログラムは、MNKF と緊密な連携にある RCCP や PSWDO はじめ、The Western Union Foundation をステークホルダーとするローカル NGO の AWECA Foundation, Inc. が参画している。さらに、1994 年 Fidel V. Ramos 大統領の提唱で創設された TESDA（The Technical Education and Skill Development Authority）によって、被災地域に

対する人道支援プログラムが認証され、公式なディプロマコースとしてMOAが締結された。美容技術クラスのプログラム参加者には、ヘアカット、マニキュア、ペディキュア、フットスパに必要な美容キットが私物として供与され、HAVENを退院した後の生活にも活用できるよう配慮がされている。

少女たちは、道具一式が納められたバンティーマックから鋏や櫛を手にとり、初めて自分の将来に現実の光を見出し、満面の笑みをたたえていた。美容キットは、これから社会で生き抜くための技術と、精神的な自信や知力を備え養うことを目的とする、重要なツールである。筆者は、このプログラムを実践するにあたり、40数年の職業経験から少女たちが留意すべき問題点をHAVENに提起し、十分

に認識を深めるよう喚起した。何故ならば美容という仕事は、接客というプロセスを通して顧客と向き合うサービス業の一種であり、「日髪を結う女」と揶揄され一日だけでもつセットのために毎日サロンを訪れる、華やかな水商売や性産業で働く女性を上得意の顧客とする一面がある。従業当初の女性は、辛いトレーニングや低賃金でも、明確な目標を目指している自分と向き合えるが、次第に同世代の女性が着飾って来店し楽しそうに振舞う姿に憧れを抱き、志半ばで誘惑に負け転職してしまうという実態が明らかとなっているからである。米国では、HAVENに保護されたようなハンディキャップを負った少女たちにとって、「接客が伴う美容の仕事に携わることは、再び同じ道を歩む危険性があり適切でない」という専門家の指摘から、ライブリーフッドプログラムとして採用していない州も存在している。しかし、日本最大級の栃木女子刑務所では、社会復帰をするための有用なライブリーフッドプログラムのひとつとして、現在も美容技術のディプロマ取得コースが実践されている。HAVENで実践される美容技術プログラムは、「アートセラピー・プロジェクト」で吐露した内なる声に耳を傾け、少女たちが背負っているカルマにも配慮したカウンセリングを慎重に行いながら、受講希望者に適応した支援をすることが極めて重要である。

2010年3月31日にHavenで行なわれ美容技術クラス修了書授与式の式典では、2009年11月10日に5年間のMOAを締結したSIK会長から祝辞が寄せられ披露された。

美容技術プログラムを受講した22名のうち、21名がマニキュアとペディキュア、16名がヘアカット、21名がフットスパのコースを見事に修了し、その努力と栄誉を称え修了証書が授与された。日本や欧米で行われているカリキュラムとは全く異なり、国家試験や州の試験

5 1996年、国際ロータリー2550地区のWCS活動にロータリークラブ会員の夫人としてSIKメンバー3名が初めて参加する。SIKは、ピナトッポ火山噴火災害の被災地域で行われた人道支援活動に帯同し、事前に筆者と打ち合わせを重ねて現地調達した、国際ソブチミストのシンボルマークがプリントされたTシャツ200枚とサンダル400足を、女性と子供を対象に配布する独自の支援活動を実践した。特に2名のSIK会員は、R.I.-2550地区ガバナー夫人として、国際大会の参加はじめ様々な国際奉仕活動に関わってきた経験から、HAVENの存在を看過できない問題と認識していた。

2004年、筆者はSIKの篤志家に託された義捐金の有効な活用法をDSWDと協議し、荒廃したHAVENの敷地を開墾してエコ・ファームを作るプロジェクトを立ち上げた。5年を期限とするMOAを取り交わし、キノコの温室栽培、ミミズ養殖、有機栽培農法など、ライブリーフッドプログラムの可能性を模索した。

2008年には、SIKからHAVENの継続的な支援を目的とする義捐金が、設立20周年記念事業の一環として供与された。2009年11月10日、初めてSIKの会長、国際奉仕委員長、理事の会員5名がHAVENを公式訪問してMOAの調印式を行い、新たにライブリーフッドプログラムを5年間支援する事が確約された。このプログラムは、MNKFが中核となるマルチラテラルなネットワークによって、サポートするフレームワークが構築され、持続可能なプロジェクトになる。SIKのHAVENに対する人道支援活動は、フィリピンの地元紙や日本の新聞も大きく取り上げられて報じている。有機農法による野菜作りは販路を拡大するレベルまで達し、美容技術習得のプログラム受講した22名はディプロマを取得している。

にパスしてディプロマが授与されるものではないが、一人ひとりの新たな人生をスタートさせる、貴重なステッピング・ストーンとなった。

7. おわりに

マルチラテラル・ネットワークを機能させるには、特定の財源に依存することのないマルチステークホルダー・エンゲージメントの概念を視野に、広範な資金調達を模索することがとても重要である。筆者は絶えずこの点を意識しながら人道支援に関わってきた。そのプロセスは、マルチラテラルなネットワーク構築における一定の成果とそれを維持することの難しさに直面することの繰り返しであった。

マルチラテラルなネットワーク構築を可能とする要因としては、まず、人道支援活動とその対象者に対するステークホルダーの「理解」があげられよう。小学校の総合学習からスタートした人道支援活動に対するアプローチが、国際理解教育を推進させ、シームレスなマルチステークホルダー・エンゲージメントのフレームワークを形成する礎となった事例において最も重要だったのは、子どもたちの「理解」と「関心」である。それに加えて、支援の何らかの成果を分かりやすく伝えて行くことも、関心や関わりを継続させていくうえで極めて重要となる。本稿で紹介した「HAVENのエンジェルたちへ」と題されたチャリティーコンサートはその象徴的な一例であり、毎年 MNKF のプロジェクトに参画する大学生や高校生のスタディーツアー等、ステークホルダーの理解を得るには時間をかけた粘り強い働きかけや交渉も必要である。膨大な義捐物資の空輸に関しては、R.I. の知名度を利用して外務省から日本航空に働きかけを行い、国際援助物資扱いとして無償で搬入することが出来ていた。しかし、時の政情や企業業績の悪化に伴い協力体制を維持することが

困難となり、搭乗カウンターで巨額の超過料金を突然に徴収されるというトラブルに見舞われた。以後 MNKF は、フィリピン政府の関係機関と緊密な連携を図り、理解と協力を得てフィリピン航空のサポートを享受している。

関係が一度構築されても、それを維持することは容易でないことにも留意が必要である。

MNKF がコーディネートした HAVEN の人道支援活動に資金提供を行ってきた国際的な女性の支援組織 SIK は、DSWD との間に5年毎の更新見直しを明記した合意締結書を取り交わしプロジェクトに参画してきたが、その後2014年の段階で契約を更新することなく資金の提供を打ち切っている。この結果、HAVEN のライブリーフッド・プロジェクトは、現在止まっており、いつ再開できるかはっきりした見通しは立っていない。SIK と DSWD の MOA が更新されず深刻な検討課題を提起している。実際に HAVEN を訪れた会員の証言や、年次総会に招聘され映像を交えた報告を行っても、会員の中には遠い異国の人里離れた HAVEN で行われているプログラムの理念や意義が見出せず、組織内のコンセンサスを形成することが困難であったことが、支援打ち切りの大きな背景にあったと思われる。自助努力や自立心の欠落（明確な根拠のない偏向）など被災者に対する不信感を理由に、HAVEN を訪れたことのない会員から人道支援に反対するコンセンサスが図られ、援助が途絶えてしまった。こうした事象は、筆者自身が対峙し続けてきたジレンマの一つであり、重要な問題として提起したい。現実には、根拠のない偏向や支援プログラムの転換によって、「安易」に援助が打ち切られるケースが少なくないと思われるが、このことも特定の資金に依存しないマルチステークホルダーの構築がより重要な課題となっていることを示唆している。ある団体が一旦ステークホルダーになったからといって、その関

係が自動的に保障されているのではなく、「理解と協力」を求めるために、持続可能な人道支援の必要性と成果に関して継続的にメッセージを発信していく必要がある。

最後に、マルチラテラル・ネットワークとマルチステークホルダー・エンゲージメントをベースとするフレームワークによって行われる人道支援活動の、中核を担う組織と実践者に求められる必須の条件として、Correct（修正・中和）、Connect（連結・接続）、Coordinate（調整と協調）、Compose（構成・組織化）、Conduct（運営・指導・実施）をするための、5C-Control Element（5項目の統制要件）が肝要であることを強く主張したい。

引用・参考文献

- ハーマン, ジュディスL. (1999). 『心的外傷と回復』.
中井久夫訳. みすず書房
- ハイアット, アーロン. (1998). 『手続き要覧
ロータリアンの手引き』. 国際ロータリー
One Rotary Center.
- フォワード, デイビッド. (2009). 『奉仕の一
世紀.』
菅野多利雄訳. 国際ロータリー
One Rotary Center) ISBN 0-915062-23-2.
- マス, デイビッド. (2004). 『トラウマ「心の
後遺症」を治す』. 大野裕監訳. 村山寿美子
訳. 講談社.
- ルイス, シンクレア. (1922). 『バビット』.
ハーコート・プレイス・アンド・ハウス
社..1972. 荻田元司訳.
- ノーベル賞文学全集5. P197. 主婦の友社.
- ロジャー, スナタリー. (2000). 『表現アート
セラピー 創造性に開かれるプロセス』. 小
野京子・坂田裕子訳.
誠信書房.
- 前原勝樹, (1992). 『ロータリー入門書「前原

ガバナー講話集』. 北斗事業出版

Riddell, Roger, C. (2007). “Does Foreign Aid
Really Work?.” Oxford University Press.